

HPV検査単独法による子宮頸がん検診の 受診者への対応（問診・説明）

検診受診前に説明すべき事項(1/2)

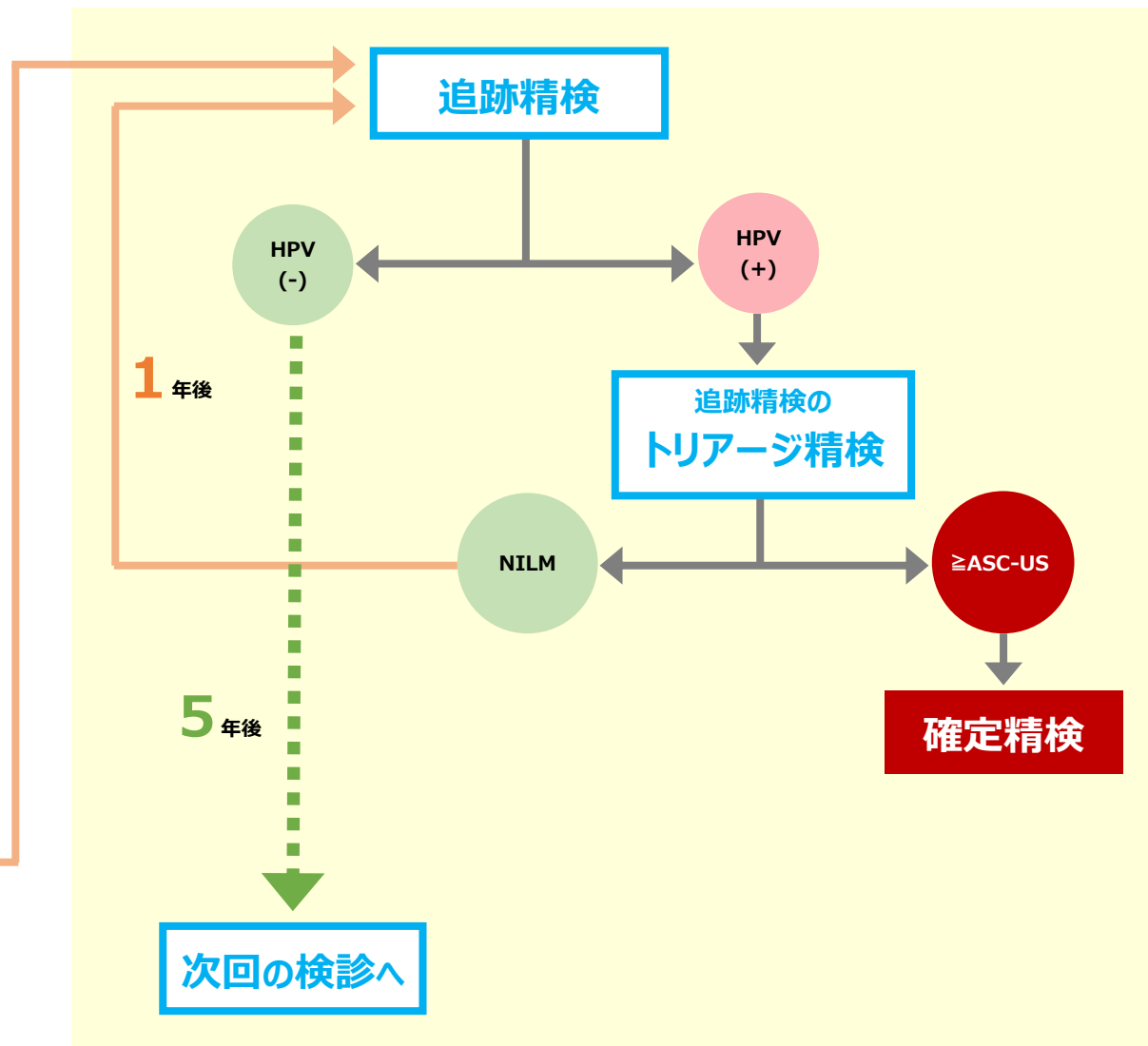
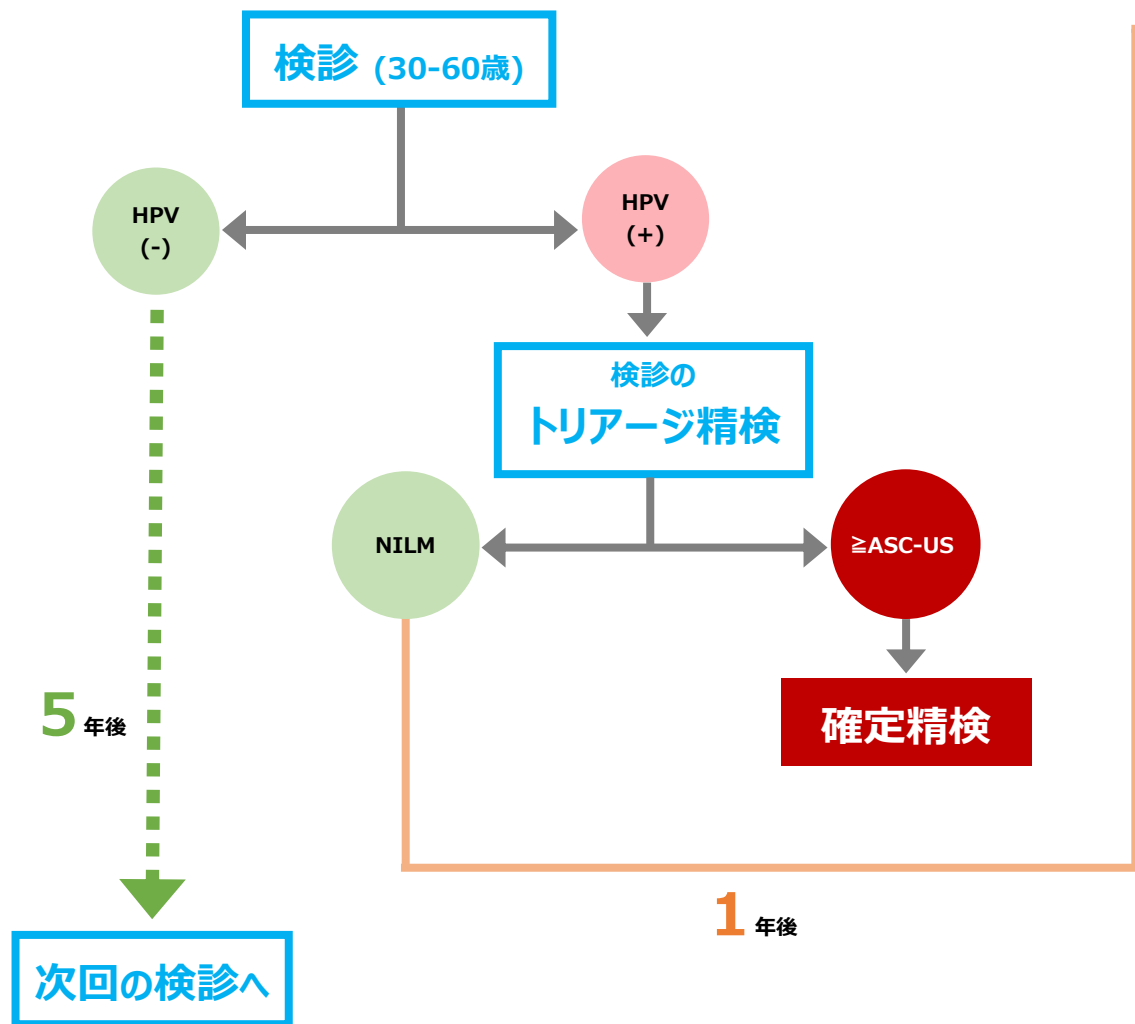
- 1 我が国では、女性のがんの中で子宮頸がんを罹患する人が多く、
特に30~40歳代の女性で近年増加傾向にある
- 2 発見の対象としているのは子宮頸部の前がん病変および子宮頸がんであり、
その他の疾患は対象とはしていないこと
- 3 検診の利益 = 子宮頸がん検診を受けることで、がんになるリスクや死亡率が減少すること
- 4 検診の不利益 = 出血等の偶発症、偽陽性、偽陰性、過剰診断について
- 5 検診の対象外となる者は受診してはいけないこと

HPV検査単独法による子宮頸がん検診の 受診者への対応（問診・説明）

検診受診前に説明すべき事項(2/2)

- 6 子宮頸がん検診は一度受診して終了ではなく、
HPV 検査単独法による場合は5年に1回の受診の継続が重要であること
- 7 HPV 検査陽性となった場合は、必ずすぐに残余検体で細胞診（トリアージ精検）が実施されること
- 8 HPV 検査（検診）陽性で、細胞診（トリアージ精検）がNILM の場合は、
必ず次年度にHPV 検査（追跡精検）を受診すること
- 9 HPV 検査（検診）陽性で、細胞診（トリアージ精検）が $\geq$ ACS-USの場合は、
必ず直ちに確定精検（コルポスコピー・組織診）を受診すること
- 10 検診結果（HPV 検査）、トリアージ精検結果（細胞診）および確定精検（コルポスコピー・組織診）
は、検診事業評価を行うため、検体採取した機関と、実施主体に報告すること
- 11 HPV 検査（検診/追跡精検）陰性と判定された場合でも、症状がある場合は医療機関の受診が重要であること

HPV検査単独法単独法による 子宮頸がん検診のアルゴリズム



HPV検査単独法による子宮頸がん検診の 受診者への対応（問診・説明）

検体採取前に説明すべき事項

確認内容	具体的な確認事項	対応
 月経に関する 情報	■ 最終月経開始日と期間 ■ 月経周期あるいは閉経年齢 ■ 妊娠の場合、妊娠週数	■ 基本的には月経中の検体採取は避ける ■ 妊娠の場合、検診を実施するか否かを判断する(妊娠週数によって検体採取が禁忌の採取器具がある)
 性交経験 の有無	■ 1度でも性交経験があるか	■ 1度もなければ、子宮頸がんのリスク因子であるHPV感染の可能性は低く、子宮頸がん検診は勧められない旨を説明し、本人の希望を確認する
 分娩歴	■ 分娩歴があるか	■ 検体採取実務において、器具の選択等の配慮を行う

HPV検査単独法による子宮頸がん検診の 受診者への対応（問診・説明）

検体採取前に説明すべき事項

確認内容	具体的な確認事項	対応
 不正性器出血の有無	■ 不正性器出血の自覚(月経時以外の出血、褐色・黒色・ピンク色帯下、閉経後出血) ■ 月経異常(過多月経、不規則月経) ■ 褐色帯下	■ 月経周期とあわせて、不正性器出血が疑われる場合は、子宮体がんの検査等のために、婦人科での保険診療の受診を促す
 子宮頸がん検診受診歴とその結果	■ 最終受診年月 ■ 検査方法 ■ 検査結果	■ 不必要な高頻度の子宮頸がん検診は避ける ■ 医療機関での受診が必要な者は検診を受診しないように促し、医療機関受診の指導を行う(ただし、本人からの情報収集には記憶違い等が発生するため、客観的な記録照会が望ましい)

HPV検査単独法による子宮頸がん検診の 受診者への対応（問診・説明）

検体採取前に説明すべき事項

確認内容	具体的な確認事項	対応
 子宮頸部病変 での婦人科 受診歴	■ 疾患の診断名(子宮頸がん、CIN3、AIS、CIN2、CIN1、細胞診異常など) ■ 手術の有無・内容・時期 ■ 通院開始・終了時期	■ 浸潤がん治療中・治療後の者や、子宮頸部病変で医療機関での経過観察中の者、術後経過観察中の者は検診を受診せず、医療機関での指示に従うように促す
 子宮全摘手術 の情報	■ 子宮全摘手術の有無 ■ 手術時の年齢 ■ 摘出手術の理由(筋腫等)	■ 子宮頸部のない者は子宮頸がん検診の対象外である